

身体意識の理論

—サルトルの「非〓反省的意識」と認知神経科学—

柴 田 健 志

はじめに

この論文の主題は「身体意識」である。サルトルの意識の哲学におけるこの概念の重要性を指摘した上で、現代の認知神経科学の成果を参照してその意味を追求することが論文の目的である。

問題になるのは身体との関係において見られた意識の存在である。意識はどんなふうに身体と関わっているのだろうか。サルトルによれば、この関わりは身体についての意識という論理だけではとらえることができないものである。たしかに、われわれは身体を内的または外的に知覚することで身体を意識している。しかし、サルトルによれば、身体を対象として知覚する意識という視点からは、意識の存在そのものはとらえられない。意識の存在そのものを問題にするならば、むしろ意識とは身体そのものであると考えなければならない。サルトルにとって、意識とは身体についての意識ではなく、「身体意識」というべきものなのである。この「身体意識」という主題を考察していくにあたって、問わなければならない点は二点ある。

第一に、「身体意識」という考えそのものが導き出される論理である。この考えはいったいどこから出てくるのであろうか。私の解釈によれば、この考えは自己意識を「非〓反省的意識 (conscience non-reflexive)」(または「前〓反省的意識 (conscience préreflexive)」)とみなすサルトルの論理から出てくるものである。実際、サルトルのテキストにそって「非〓反省的意識」という意識の存在を掘り下げていくと、そこに「身体意識」という形での意識の存在が見出されるのである。したがって「身体意識」に関する以下の考察も、この論理をたどることから開始されなければならないであろう。

第二に、「身体意識」としての自己意識という論理である。身体についての意識ではなく、むしろ身体そのものであるような意識が自己意識であるとサルトルはいうのだが、この主張をどのように理解すべきであろうか。サルトルは『存在と無』において「超出」の概念を駆使してこの論理を明確にしようと試みているが、その議論には不明確な部分が残っている。そこで、この点に関しては、現代の認知神経科学の成果を踏まえて「身体意識」の理論の構築を試みているドロテ・ルグラン (Dorothee Legrand) の議論を参照しなければならない。ルグランは「前〓反省的意識 (pre-reflective consciousness)」の意味を「身体意識 (Bodily consciousness)」として説明した上で、「身体意識」の構造を遠心神経と求心神経の総合過程に求めるという主張を展開しているが、この神経モデルはサルトルの「超出」概念の分析に極めて有効なものなのである。

このような見通しをもとに、私はサルトルのテキストにそって「非〓反省的意識」あるいは「前〓反省的意識」とは「身体意識」にはかならないという解釈を提案した上で、「身体意識」の意味に関してはルグラ

ンの神経モデルにもとづく解釈を追求してみた。以下の論考はこの二点に関する研究成果をまとめたものである。

1 非Ⅱ反省的意識

自己意識 (conscience de soi) とは何であろうか。意識は自己以外の何かについての意識であると同時に、それ自身を意識している。つまり、意識の存在には、意識それ自身を意識しているという構造が含まれている。またそうでなければ、意識という言葉の意味は十全に理解されないであろう。では、意識はいかにして意識それ自身を意識するのであるか。この問いかけに対する答えとして、意識は意識それ自身を対象として認識することによって自己意識をもつという答えがありうるが、そのような考えはサルトルのものではない。むしろサルトルが反対しようとした考えである。意識が意識それ自身を認識することは反省と呼ばれる。つまり、サルトルが反対したのは、自己意識が反省によって成立しているという考えにほかならない。サルトルがこのような考えに反対したのは、そこに明白な論理的欠陥が含まれているからである。

意識を対象とする意識が自己意識であるという主張は、いつけんもつともらしい。意識されているものとそれを意識しているものが、この場合は同一のものだからである。しかし、意識しているものは、意識されているものが自己自身と同一であることを、いかにして知るのだろうか。それを知るためには、意識するものがすでに自己意識でなければならぬ。ところがこの点は前提できない。なぜなら、この点を前

提することは、意識がはじめから自己意識であるということを確認することになるからである。したがって、この点を認めないならば、意識する意識が自己意識であるために、この意識をさらに意識する別の意識が要求されなければならないであろう。ところが、この意識もまた別の高次の意識を要求し、こうして無限に進む。つまり、自己意識が反省によって成立するという主張は、はじめから自己意識の存在を認めることに帰着するか、さもなければ無限遡行に陥ることになるのである⁽¹⁾。

このように、自己意識の構造は反省的意識としては理解できないものである。そこでサルトルは反省による説明を捨て、意識の存在をはじめから自己意識として理解する論理を選択するのである。

「無限遡行を避けようとするならば、意識とは自己の自己に対する直接的で非Ⅱ認知的な関係であるとしなければならない。」⁽²⁾

この論理の利点ははっきりしている。反省以前の段階で、意識がすでに自己意識という構造を持っていると考えることができれば、反省という作用も無理なく理解することができるのである。つまり、反省という場面において、意識が意識それ自身を認識していることを知ることができるとは、反省以前の段階で意識がすでに自己意識として存在しているからであると考えられるのである。この意味で、反省的意識を可能にするのは「非Ⅱ反省的意識」であるとサルトルはいう。つまり、「非Ⅱ反省的意識」こそ自己意識の基本的な存在形態であると考えられるのである。

「このように、反省される意識に対する反省の優位はいかなる意味においても存在しない。反省によって、反省される意識が意識それ自身に示されるというのではない。まったく逆に、反省を可能にしているのが非反省的意識なのである。」^(三)

では、「非反省的意識」そのものはどのように理解されるのだろうか。意識が意識それ自身を意識しているということは、どのようなことなのであろうか。対象として認識するのではないのであれば、それはいったいどのような認識なのであろうか。この問いは、以下の考察全体が答えようとしている問いである。この問いを、「身体意識」という水準において設定し直していく前に、ここではもう少し「非反省的意識」というものの存在性格を考察しておく必要がある。

サルトルは、「非反省的」という性質を「非定立的 (non-positionnelle)」という性質として言い直している。通常の意識において定立されているものは意識以外の対象である。コーヒーを飲むときのコーヒーカップ、横断歩道を渡るときの信号機、今読んでいる小説の筋、こういった対象が意識において定立されている対象である。これに対して、コーヒーカップ等に注意が向けられているとき、意識そのものには注意は向けられていない。言い換えれば、意識そのものは対象として定立されていない。しかしながら、このような「非定立的」な水準においても、意識は自己意識として存在している。だからこそ、自己自身を反省したとき、「私はコーヒーを飲むとしていた」ということを明確に述べることができるのである。

「意識は私の知覚を認識しないし、定立もしない。私の現実の意識の中に志向としてあるものはすべて外に向けられており、世界に向けられている。これとは反対に、私の知覚についての自発的意識は、私の知覚的意識とつて構成的なものなのである。言い換えれば、対象についてのあらゆる定立的意識は、同時にそれ自身についての非定立的意識なのである。」^(四)

このように、自己意識とは意識が何らかの対象を志向しているときに、「非反省的」ないし「非定立的」な水準においてつねに存在し、暗黙に現前しているものなのである^(五)。どのような経験もつねに「私」の経験として反省的にとらえられるのはそのためである。この点をできる限り鮮明に認識しておく必要がある。自己意識とは、意識がそれ自身に注意を向けることによってではなく、むしろ自己以外の対象に注意を向けることによって立ち上がってくるものなのである^(六)。

以上を踏まえ、ここで次のように考えてみるができるであろう。もし私が身体として存在しているのでなければ、私はコーヒーを飲むことなどできないであろう。一般的にいえば、身体がなければ外部の対象を志向することができないであろう。したがって、自己意識というものが、外部の対象が志向され定立されるとともに非定立的に現前するものであるすれば、私は身体なくして自己意識をもつことができないであろう。ということは、いったいどういふことになるのであろうか。結論だけ先にいえば、「非反省的意識」とは「身体意識」でなければならぬということになるはずである。以下ではサルトルのテキストにそってこの論点を敷衍していかなければならない。

2 身体意識

意識が志向するのは、通常は意識それ自体ではなく意識の外にある対象である。例えば、コーヒーカップがそのような対象である。コーヒーを飲むとき、意識は自己自身ではなくコーヒーカップに注意を向けなければならぬ。しかし、だからといって、意識それ自身は何ら意識されていないかといえば決してそんなことはない。実際、この行為が中断されたとき、「私はコーヒーを飲む」として「た」ということを述べることができるのは、自己意識が存在していたことの証拠である。

このような自己意識の存在に関する考察を一步進めるために、次のような事実に着目してみなければならぬ。コーヒーを飲むとして、いつか意識されたり意識されている対象はコーヒーカップである。しかし意識されているのはそれだけではない。コーヒーカップをつかみにいく自分の手も意識されているのでなければならぬ。そうでなければ、コーヒーカップをつかむことなどできないはずである。では、自分の手は対象として意識されているのであろうか。そうではあるまい。意識の対象はあくまでコーヒーカップであり、自分の手ではない。にもかかわらず自分の手は明らかに意識されているのである。

この事実から次の点が明白に浮かび上がってくるであろう。意識の存在と身体との存在は、外的な事物を対象にした通常の経験において、まったく同一のパターンで意識されているということである。コーヒーを飲むとして、「私」が意識されているのと同じように、コーヒーを飲

もうとしている私の手が意識されている。どちらも、対象として意識されているのではないのに、間違いなく意識に現前しているという点で、同一のパターンである。この点を踏まえ、次のように考えることができる。コーヒーを飲むとして「私」の意識とは、じつは私の「手」の意識ではないかと。実際、「私は私の手である」⁽⁷⁾とサルトルは述べている。無論、「手」の意識というのは強調した言い方であって、実際には「手」を焦点にした身体の意識というべきであろう。したがって、一般化した形で表現すれば、「非反省的意識」という形態で存在する自己意識とは、じつは「身体意識」ではないかと述べることができる。意識の存在を具体的な経験から切り離して考えるのでない限り、このような結論は避けられないように思われる。

このように、自己意識を身体意識として読み替えることが、サルトルの意図に即したことであるという点を確認するために、「事実性 (facticity)」の概念に触れておく必要がある。事実性とは、意識がそれ自身の存在の根拠であることができず、むしろ意識の外に存在する具体的な状況によって規定されて存在するという条件を集約する概念である。私の解釈によれば、この点から自己意識の存在を掘り下げていくことで、「身体意識」という視点がえられるはずなのである。

意識がその中で現実存在することになる状況は、意識にとっては外的であり、その意味で偶然的なものである。しかしまた同時に、意識が現実存在するには、意識にとって偶然的な状況の中に身を置いていなければならぬという点は必然的なものである。この点が必然的であるということは、何らかの偶然的な状況の中においてでなければ、意識が存在することは不可能であるということの意味している。これが事実性

の意味するところである。では、意識を事実性の中に置き入れるのは何であろうか。いうまでもなくそれが身体である。

「むしろ身体とは、対自がそれ自身の根拠ではないという事実のことである。偶然的な諸存在のただ中にとらえられた偶然的な存在として現実に存在する必然性という形でこの事実が言い表される限りにおいては。」⁽⁶⁾

このように、意識が事実に存在するということは、身体が存在するということを意味する。すると、意識の存在は身体が存在であるということにならないであろうか。というより、そのようにしか考えることができないのではなからうか。無論このことは、意識が現実に存在するために身体と結合しなければならぬということの意味していない。なぜなら、その場合には、身体と結合する以前の意識の存在が認められてしまっているからである。そのような意識がかりに存在したとしても、それは世界と何のかかわりも持たない意識であろう。無論、そのような意識をサルトルは認めないのである。

このように考えていくと、やはり自己意識とは「身体意識」にほかならない。外的な世界に対して正面から関わりながら、世界に関わって自己自身をいわば側面から意識している存在、それが「身体意識」としての意識である。無論、「身体意識」とは何かという点が問題なのであるが、この点を考察する前に、ここではむしろ自己意識とは「身体意識」にほかならないという点を、さらに別のテキストで確認しておく必要がある。

サルトルにとって、自己意識は自己についての意識ではない。言い換えれば、意識が意識それ自身を対象として認識することによって自己意識が成立するのではない。しかし、フランス語の文法上の制約のために、この点を明確に表現することは難しい。「自己意識」をフランス語で表現するには \wedge conscience de soi \vee としなければならぬ。つまり「 \sim についての」を意味する前置詞 \wedge de \vee が文法上どうしても必要なのである。そこでサルトルは、 \wedge conscience (de) soi \vee というように、 \wedge de \vee を括弧に入れることで文法上の問題を解決しようとしているのである⁽⁷⁾。したがって日本語に正確に翻訳すれば「自己意識」ではなく「自己(についての)意識」としなければならぬであろう。

ここで注目すべきことは、サルトルが身体についてもこれと同じ文法上の処置を施しているという点である。すなわち「身体意識」は \wedge conscience (du) corps \vee と表記されているのである⁽⁸⁾。したがって、これをそのまま日本語に翻訳すれば、やはり「身体(についての)意識」としなければならぬであろう。そして以下に見るように、身体についてもこのような表記がなされなければならない理由は、「自己(についての)意識」という表記がなされる場合と同じなのである。

身体は意識が世界に向かう際の「観点」を構成している。しかし、身体は例えば見晴し台のような観点とは根本的に異なる。見晴し台は確かに世界を見渡すひとつの観点であるが、われわれは見晴し台から一步後退することによって、見晴し台そのものを別の観点から眺めることができる。ところが、身体という観点に対してはもはやいかなる観点もとることはできない。「身体とは…私がそれについてはもはや観点をとることのできない観点である」⁽⁹⁾。では、このことはいったい何を意味し

ているのであろうか。少なくとも意識が世界に向かっていいる際には、身体そのものを対象として認識することはできないということを意味している。私が世界に向かっていいるとき、身体はむしろその観点として暗黙に現前していると考えられるのである。そしてここから「身体（についての）意識」という表現が出てくるのである。テキストを引用しよう。

「身体はそれについての観点が存在しえないような観点であるというまさにその理由によって、非 \parallel 反省的意識の水準においては身体についての意識というものはまったくありえないのである。それゆえ身体は非 \parallel 措定的な (non-thétique) 自己（についての）意識の構造に属するものなのである。」^(十二)

このように、意識が外的な世界を志向する際の意識の存在は、身体が存在に一致している。ひとことではいえば、「意識は身体以外の何ものでもない」^(十三) のである。

サルトルが「自己意識」の存在を基本的に「身体意識」として理解しようとしているという私の解釈は以上である。この解釈を踏まえ、「自己意識」の問題を身体の水準で追求してみなければならぬ。「身体意識」とは何であろうか。これが問うべき問いである。この問いに答えることによって、「自己意識」とは何かというそもそもの問いに答えなければならぬ。

3 超出

「身体意識」とは何かという問いを解明するための重要な手がかりが、「超出」の概念にほかならない。サルトル自身が、「身体（についての）意識」を論じる際に、この概念を活用しているからである。

サルトルにとって、意識とはそれがあるところのものではあらず、またあらぬところのものであるような存在である。このようなレトリカルなフレーズは、サルトルに特有のものである。無論、重要なのは、サルトルがこのようなフレーズによってとらえようとした意識の存在性格にほかならない。サルトルがとらえようとしたのは、意識の動的な性格にほかならないという点を理解すれば、このフレーズを次のように言い直すことができる。すなわち、意識とはそれがすでにそうであるところのものとしては存在せず、まだそうではないところのものとして存在することになるような、そういう動的な存在である、と。意識とは自己自身の諸可能性に向かっていく存在であるがゆえに、つねに所与としての自己を乗り越えざるをえないのである。そして、所与を乗り越えるという局面が「超出 (dépassement)」という概念によってとらえられているのである。

サルトルによれば意識はつねに意識それ自身を「超出 (dépasser)」し、乗り越えなければならない。「超出」とは、自己が置かれている状況を出発点にして、その彼方に設定された自己の諸可能性を目指すことである。いまある自分自身を超えていくという意味である。しかし、意識が実際に向かっているのは、自己が存在する世界内の対象であって、意識それ自身の「超出」という側面は、非 \parallel 反省的あるいは非 \parallel 定立的な水

準に止まっている。サルトルの以下のような記述は、そのような水準の記述として理解されなければならないであろう。

「非決定的な意識とは、身体（についての）意識であるが、身体とは、意識が意識となるためにそれを乗り越え無化するものである。つまり、身体とは、意識がそれであるべきではないが実際にはそれであるところのものであり、また意識があるべきものになるためにそれを超えていくところのものである。」^{〔十四〕}

このテキストには、意識が意識それ自身に現前するという「自己意識」の存在を可能にするのは、「超出」にほかならないという重要な論点が含まれている。しかし、ここで注目すべき点はむしろ次のような点である。意識が自己意識として存在するには、それ自身を乗り越えていかねばならないが、乗り越えられるのは身体にほかならないとされている。とすれば、このテキストには重要な問題がある。というのも、意識とは「身体意識」であるというのだから、意識と身体は無論同じのものであり、したがって、乗り越えられるのが身体ならば、それを乗り越えるのもまた身体でなければならない。しかし、サルトルの論理がこの点で明瞭であるとはいえない。意識が身体を乗り越えるとサルトルがいうとき、意識と身体が同じ存在を指しているという点は明確にされていない。テキストを文字通りに読めば、この点はむしろ曖昧にされてしまっているといわざるをえないであろう。しかも、意識とは「身体（についての）意識」であるとはじめに断った上でこのような曖昧な記述をしているがゆえに、この論理には最後までどこか納得できないものが残るわけである。

身体を乗り越える意識とは、身体としての意識それ自身でなければいったい何であろうか。

この論理をはっきりと主張しない限り、「自己意識」とは何かということもとの問いに、身体という水準において答えを出すことはできない。そこで、まず問いそのものを確認してみよう。意識がそれ自身をどうやって意識しているかという問いに、対象認識という論理で解答することができると考えなくてはならない。しかし、そうであるとすれば、自己意識とはどのような認識なのであろうか。これが問題であった。そしてこの問題を身体の水準に移して考察することが、ここまで進めてきた議論の前提である。ところが、「超出」の概念を駆使して自己意識の構造を説明しようとする論理の中で、サルトルがあたかも意識と身体が別のものであるかのような語り方に訴えているという事態に逢着してしまったのである。しかも、かりにサルトルの論理を受容したとしても、身体を超出することがどうして「自己意識」をもたらしうるのかは、このままでは理解できないであろう。

しかしにもかかわらず、「自己意識」の構造を理解するための方向性という点に関しては、「意識は身体以外の何ものでもない」というサルトルの基本的な提案は納得のいくものである。

そこで、あえてサルトルに忠実にこの方向を押し進めるとすれば、身体が身体を「超出」することにおいて、「非反省的」な「自己意識」が成立していると考えなければならない。管見によれば、まさにこのスタンスで「自己意識」を考察している現代の第一人者がドロテ・ルグランである。そこで、ルグランを参照することによってサルトルを読み直してみなければならない。身体による身体の超出とは、いったいどのよ

うな事態なのであろうか。これが問題である。

4 神経モデル

ルグランは、機能的核磁気共鳴画像法 (fMRI) が開発されることによって飛躍的に発展した認知神経科学の成果を踏まえ、身体という水準における「自己意識」の解明に取り組んでいる。無論その論説全体をここに取り上げることはできない。ここでは「身体意識」としての「自己意識」という主張を展開するにあたってルグランが採用している神経モデルを、サルトルの「超出」概念の解釈に役立つ限りで参照するに止めべきであろう。

「私はいまコーヒーを飲もうとしていた」という形で述べられるように、自己の外部の対象に向かって意識にそれ自身が現前していること。そしてくり返し述べたように、意識がそれ自身を対象として認識することなしにこのような現前が成立していること。この点についてはルグランの主張とサルトルの主張は同一である。この点を確認するために、ルグランのテキストを引用しておく必要がある。

「われわれは何らかの志向的对象を意識的に経験しているまさにそのときに自己自身を前々反省的に経験している。」^{十五}

「前々反省的自己意識をよりよく理解するためにきわめて重要な点は、われわれが自己自身ではなく世界の方に志向的に方向づけられている

ときでさえも、われわれが前々反省的に自己を意識しているという点である。」^{十六}

また、このような自己意識のあり方が「身体意識」という形で理解されている点もこの両者に共通である。ルグランは「身体意識は自己意識の真正の形態であるか？」^{十七}という問いを提出し、かつその問いに肯定的に答えようとしているからである。

ところが、「非々反省的意識」ないし「前々反省的意識」とはどのようにして成立しているかという問題を解明するためにサルトルが「超出」の概念を駆使したのに対して、ルグランは神経モデルに依拠しているという点において、この両者のアプローチは明瞭に異なっている。そこで、かならずしも明快であるとはいえないサルトルの議論を、ルグランが依拠する神経モデルによって解釈し直してみなければならぬのである。

問題点を鮮明に認識するために、サルトルの「超出」の論理を簡単に振り返っておくべきであろう。意識はおのれの諸可能性へ向かっていく存在であるがゆえに、所与としての存在を「超出」する。所与としての存在とは、世界の状況の中に置かれた身体である。ところで、所与としての存在を「超出」するのもまた身体でなければならない。そう考えなければ論理に齟齬が生じてしまうからである。サルトル自身の論理にはそのような齟齬が垣間見えていた。

しかし別のテキストでは、意識が身体を「超出」するとき、身体はすでに過去になっているという重要な点を、サルトルは的確に指摘している。

「対自のひとつひとつの企てにおいて、ひとつひとつの知覚において、身体はそこに存在する。身体はそれを逃れる現在にいまなお接している限りに対して直接的な過去である。これは身体が観点であると同時に出发点であることを意味している。すなわち私がそれであるところの観点であり出发点であるものは、同時に私があるべきものへ向けて超出していくものなのである。しかし絶えず超出されながら超出の核心に絶えず再生してこの観点、私が絶えず飛び越えるのに私の背後に残っている私自身であるようなこの出发点、それが私の偶然性の必然性である。」^{〔一八〕}

身体としての意識は、おのれがたったいまそれであったところのものではすでにない。にもかかわらず、たったいまの私はいまの私に対して関係を持ち続ける。この指摘は重要である。なぜならこのような過去と現在をつなぐ時間構造の中にこそ、「超出」が「自己意識」を成立させる要因が存在していると考えられるからである。無論、過去の自分を対象的に認識することで自己意識が成立するのではない。なぜならそれでは「自己意識」が反省によって成立しているという主張と結局同じことになるからである。では、身体における過去と現在の関係は、どのような論理で「自己意識」を構成していくと考えられるのであろうか。これが以下の考察のポイントである。

この点からルグランの論説を参照してみよう。ルグランが採用した「順モデル (forward model)」という神経モデルに注目しなければならぬ。一九五〇年代にフォン・ホルスト (von Holst) によって提案されたこのモデル^{〔一九〕}は、近年の認知神経科学において再発見され、とりわ

け統合失調症の諸症状を説明するための有効なモデルとして注目されている^{〔二〇〕}。

このモデルによれば、身体の運動を起動する遠心性神経回路と、その結果としてもたらされる感覚を受容する求心性神経回路がコンパレータにおいて合流し、そこで遠心性信号と求心性信号の総合が行なわれていると考えられる。この単純なモデルにいくつかの要素を付け加えることで全体像が見えてくるであろう。

まず、遠心性 (efferent) の信号それ自体がコンパレータに流れるわけではなく、そのコピーがコンパレータに流されているという点を付け加えておかねばならない。遠心性信号そのものは現実の行為へとつながっていくが、そのコピーの方は現実に遂行されていく行為に先回りしそれを予測するという役割を持っていると考えられるのである。

また、コンパレータにおいてこの遠心性コピーと総合されるべき求心性の信号には、二種類の信号が区別されているという点を付け加えなければならぬ。すなわち「再帰求心性 (re-afferent)」と「外来求心性 (ex-afferent)」である。前者は自己を原因として生じた感覚結果の信号であり、後者は外部から与えられる感覚結果の信号である。この区別が重要である。なぜなら遠心性信号のコピーと総合されるのは前者のみであって、後者は決して総合されないからである。このため、自己を原因として生じる感覚と外部の原因によって生じる感覚が混同されるということは、通常は起こりえないのである。つまり、この回路によって自己／非自己の認知上の区別が成立していると考えられるのである。

ルグランはこの神経モデルを独自に発展させることによって、自己意識を成立させているのは、まさに遠心性信号のコピーと再帰求心性の信

号の総合過程であるという視点を打出しているのである。

「このアプローチの中心にある考えは、求心性信号と遠心性信号の総合が再帰求心性―有機体自身の遠心処理（自己）の結果として生じる求心性信号―と外来求心性―外部環境での出来事（非自己）の結果として生じる求心性信号―を根本的に区別するような仕方、有機体によって恒常的に行なわれているという考えである。」（二二）

では、遠心性信号のコピーと再帰求心性信号の総合過程は、なぜ自己／非自己の区別を成立させるだけでなく、さらにまた自己意識を成立させる過程でもあると考えられるのであろうか。

ルグランは言及していないが、重要な点は、この総合過程が時間的な性質をもっているという点である。すなわち、このモデルによれば、いま存在している身体とたったいま存在した身体との総合過程によって意識がそれ自身に現前し、「自己意識」が成立していると考えられるのである。いま存在している身体とはすでに再帰求心性の信号が流れている身体である。これに対して、たったいま存在した身体とは、遠心性信号を発したばかりの身体である。サルトルの言葉を借りれば「出発点」としての身体である。いま存在している身体においては、コンパレータにおいて遠心性信号のコピーと再帰求心性信号が総合されている。コピーには生じるべき感覚を予測するという役割があるが、通常はその予測に合致する信号がコンパレータ返ってくるはずである。コピーを飲むとした結果として実際にコピーを飲んでいるわけである。この時点で意識はそれ自身に対して現前していると考えられる。つまり、身体によつ

て開始された行為を、同じ身体が感知していること、これが「自己意識」の構造にほかならない。これに対し、コピーを飲んでいるときに鳴り出した電話の音はコンパレータに受け付けられない。そんな感覚を予測する信号は、そもそもコンパレータに流れてきていないからである。コピーを飲んでいるのは私だが、呼び出し音を鳴らしているのは私ではないわけである。

このように、身体がやろうとしたことが実際にその身体によってなされているということ、身体それ自身が感知することによって、自己意識というものが成立していると考えられるのである。

この点をさらなる具体例で敷衍してみよう。私は自分が話すとき、自分の声を聞いている。当たり前のことである。しかしなぜ、自分の声と他人の声を的確に聞き分けることができるのであろうか。「順モデル」を援用すれば、この疑問には次のように答えることができるであろう。自分の声は自分がたったいま発話しようとした声として聞かれているが、他人の声はそうではない。自分の声と他人の声が的確に聞き分けられるのはこのためである。ようするに、自分の声は遠心性信号のコピーがすでにコンパレータに流れていることによって予測されているが、他人の声は予測されていないというメカニズムが、自分の声と他人の声を区別していると考えられるのである。

このように自己／非自己を区別する過程がじつは自己意識を成立させる過程でもあるという点こそ、ルグランが「順モデル」から発展させた論理にほかならない。この論理にしたがえば、前もって存在する自己意識が言葉を発するのではなく、発せられた言葉を聴くことによって、そこで始めて自己意識が成立するということになる。もともと、このよ

うな時間的な遅れは決して意識されないであろう。なぜならその時点で存在しはじめた自己意識にとつては、この遅れは存在しないからである。

このモデルは理論的にきわめて有効なものである。例えば、自分の声を聞くことにおいて、意識はそれ自身に現前するというデリダの主張も、この点から理解することができるのである。つまり自分の声を実際に聞き取るまでは意識の意識への現前が延期されているというデリダの「差延 (différance)」の概念は、神経モデルによって理解し直すことができるものなのである⁽¹¹⁾。しかし、そうであるとすれば、デリダのように声を聞くという事例だけを特権化する必要はない。例えば、私がどこか目的地に向かって歩いていくとき、私は自分が歩いていることを意識している。踏み出した足が地面に接触するときの感覚が、遠心性信号のコピーと総合されることによって、意識はそれ自身に対して暗黙に現前するからである。私は、一步を踏み出す度に、歩いているのは私であることを意識しているのである。私は目的地に向かっていまいる場所を「超出」するが、それがコンパレータを起動させ、自己意識を成立させているのである。

これらの具体例を踏まえた上で、次の点を明確に指摘しておかなければならない。身体を「超出」することは、身体を過去に置き去りにして、それと手を切ることではない。むしろ「超出」される身体は「超出」を先取りし、それが遂行されていくことをその都度確認しているわけである。この意味において「超出」が自己意識をもたらすのである。身体は「超出」されながら超出の核心に絶えず再生してくる」と述べるとき、サルトルはこの点に言及しようとしていると解釈できるのである。

意識を何か身体とは別のものとして考えてしまうような曖昧な要素

は、この論理には含まれていない。例えば、たんに何かを見ているときにも自己意識はすでに存在している。このきわめて日常的な事柄を分析してみると、次のような驚くべき構造が見出されるはずである。何かを見ること自体がすでに「超出」であるという点をまず確認しておかねばならない。われわれはそこに何かあるかを確認するため、あるいは対象の形を確認するため、あるいはまた風景を楽しむため等々の志向をもつてものを見ているが、そこに何かあるかを確認することは、それを知らないおのれの存在を乗り越えることだからである。対象の形を確認するときにも、風景を楽しむときにも、同様の論理が成立するであろう。これらの場合、自己意識とは眼が何かを見ているということそれ自体である。眼は何らかの対象を見ている、つまり意識しているが、そこには何かを見ている眼それ自身が暗黙に現前しているのである。眼という器官とは別に意識が存在するからではない。眼が機械的にもものを見るのではなく、見ようとして見ているからである。見ようとするということがすでに「超出」の端緒である。そして、見ようとして見ているという、遠心性コピーと再帰求心性の総合過程のなかに、それ自身が現前してくるのである。

身体が身体を「超出」することによって自己意識が成立するという命題の意味に関する私の解釈は以上である。この解釈を唯物論と呼ぶ必要はあるまい。私はむしろ意識の問題を生命の水準で考察するという視点に立ったにすぎない。生命という水準で考えれば、身体が何らかの対象を志向するということが自体を、すでに意識の作用として理解することができる。したがってまた、身体そのものに埋め込まれた自己再帰的な神経回路が、そのまま自己意識を構成していると考えることが許されるで

あろう。

無論、このような視点は、サルトル的というよりもむしろベルクソンの
的といふべき視点である^(三三)。サルトル自身はこのような視点を回避し
ていたと考えられるのである。そこで最後に、この結論からふり返って
サルトルの哲学を評価してみることでこの論文を閉じることにしよう。

おわりに

サルトルの意識の哲学が標的にしたのは、デカルト的な心身二元論で
あつたことはいまでもない。意識の存在を身体存在と区別しかつ意
識に優越を与えるというデカルト的視点は、意識を世界から遊離させ
るような抽象的な思考をもたらす危険を孕んでいた。サルトルは世界と何
ら関わりをもたずに世界をいわば上空から見渡しようとする視点を拒否
したが、その理論的態度は明らかにデカルト的・二元論的帰結としての抽
象的思考を拒否することに結びつけて理解されなければならない。た
だし、デカルト自身は、そのような抽象的な思考を科学的認識に限定し、
日常的な生の水準においてはむしろ排除しようとしていたという点には
留意しておくべきであろう。しかし、心身を実在的に区別する限り、こ
のような抽象的思考が日常的な生の論理にまで入り込むことは避けられ
ないという点もやはり事実である。そこでサルトルは、あえて意識を身
体と同一視することで、現実的な意識の理論を構築しようとしたのだと
いふことができる。しかしながら、サルトルの論理からデカルト的な意
識優位の視点が完全に払拭されているといえるであろうか。この点に

ついて私はあえて否定的な視点を設定しておいた。私はその視点から「身
体意識」の論理を徹底しようとするようなモデルを現代の認知神経科学に求め、
サルトルのもととの意図に忠実にその論理をたどるとどのような結論
がえられるかを追求してみたのである。その結果として、自己意識とは
身体それ自体の自己再帰的な構造のなかで成立するものであるという論
理が見出された。この論理にしたがえば、意識は身体とは別に存在する
ものではなく、むしろ身体そのものであることになる。そしてここから
見直せば、サルトル自身はデカルト的な二元論への批判を徹底させず、
むしろそれを彼の哲学のなかに温存したがゆえに、「身体意識」の論理
を見出しながら、その帰結を最後までたどることができなかったという
ことになる^(三四)。『存在と無』が、生命という水準における考察を避け
たことに、その理由を求めることができると考えられる。

注

- (一) 「無限遡行」を避けるために、反省理論の内部で自己意識を認めると
すれば、「循環論法」に陥ってしまう。すなわち、「自己意識」の成立
を説明する論理が「自己意識」の存在を前提してしまうことになる。
こうして、反省にもとづく自己意識の説明は、最終的には維持できな
い。この点を明確にまとめているのは次の研究である。Zahavi, 1999,
p.18。なおサルトル自身は「循環論法」には明示的には言及していな
い。サルトルは、「無限遡行」を指摘することで反省による説明を端
的に否定し、反省以前の直接的なものとして自己意識の存在を認める
という論法をとっている。また現代の文脈で「高次表象理論 (higher
order representation theory)」といわれる自己意識の理論にも「反省」

理論に対する上の批判とまったく同じ批判が当てはまるという点については、次の研究を参照。Zahavi & Parnas, 1998, pp.692-695

- (二) Sartre, 1943 p.19, なお『存在と無』以前の『自我の超越』においてにすでに同じ論点が出ていることを指摘しておくべきであろう。Sartre, 1936, p.29

- (三) Sartre, 1943, p.19

- (四) *ibid.*

- (五) このような自己意識の理解は、その他の論点では立場の異なる現象学者たちによって共有されているものである。Zahavi, 2006, p.273

- (六) この点に関して、哲学的な「反省」理論に対する批判は認知神経科学にも向けられなければならない。なぜなら後者において「自己意識」に対応する脳領域を特定するための実験として被験者に課される課題は、外部の対象でなく自己を対象としたものだからである。実証データの分析をおしてこの点の誤りを指摘した次の研究を参照。

Legrand & Ruby, 2009

- (七) Sartre, 1943, p.363
- (八) Sartre, 1943, p.349
- (九) Sartre, 1943, p.20
- (十) Sartre, 1943, p.369
- (十一) *ibid.*
- (十二) *ibid.*
- (十三) Sartre, 1943, p.370
- (十四) Sartre, 1943, p.369
- (十五) Legrand, 2007, p.590
- (十六) Legrand, 2007, p.591.
- (十七) Legrand, 2006, p.91. なおこの問いに答える際に現象学の伝統(フッサール, サルトル, メルロ＝ポンティ)が言及されると同時に、分析哲学の伝統(ワイトゲンシュタイン, シューメーカー, エヴァンス,

ヘリー)も広範囲に言及されている。

- (十八) Sartre, 1943, p.366

- (十九) von Holst, 1954

- (二十) 統合失調症の緒症状の中でも、「影響妄想 (delusion of control)」については、Blakemore et al.2002, 2003を参照。また「幻聴 (auditory hallucination)」については、浅井・丹野 2007, 2010を参照。いずれも「順モデル」による説明の有効性を前面に出した論考である。

- (二一) Legrand, 2011, p.105

- (二二) 該当するデリダの文章を引用してみよう。「差延 (différance) の運動は超越論的主観に対して現れてくるのではない。差延の運動が超越論的主観を生み出すのである。自己触発とは、すでに自己自身であるような存在者の性格を示す経験の様態ではない。自己自身との差異 (différance) における自己との関係としての同一者が自己触発によって生み出されるのである。それは自己自身と同一ではないものとしての同一者 (le même) なのである。」Derrida, 1967, p.92.デリダ特有のレトリカルな文章であるが、その趣旨は神経モデルから導かれるものと同じである。すなわち、言葉を話す存在はまだそれ自身に現前しておらず、それを聴くという行為によってはじめて自己に現前する。ところがいったん自己が現前すると、言葉に先立って自己が現前していたのだと考えられてしまう。これが同一ならざる同一者という言葉の意味である。

- (二三) 対象を志向する運動性それ自体を意識の作用として認めるという指摘、また動物の進化における感覚⇨運動神経系の発達が意識の存在と密接に関連しているという指摘は、すでにベルクソンによってなされていることである。ベルクソンは「運動性と意識との間には明白な関係がある」という。Bergson, 1941, p.111. そして動物における運動性の発展は「感覚⇨運動系」に集約されていたと指摘しているのである。 *ibid.* pp.124-125. つまりベルクソンの考えによれば、意識の高度

化は神経系の発展と相即的に進むものであると考えられているのである。ただし、ベルクソンは自己意識という点を明示的に議論していない。このことは、ベルクソンが感覚⇨運動回路すなわち求心神経と遠心神経の回路の重要性に気づきながらその自己帰帰的な構造を考慮していかなかったということを示唆しているであろう。

(二四)この点に関しては、すでに次のような指摘がある。「サルトルは、身体が意識の主体であると主張したにもかかわらず、その存在論にはまだ二元論が残存している。」Wider,1997, p.121.

文献

- 浅井智久・丹野義彦 2007 「声の中の自己と他者―幻聴の自己モニタリング仮説―」 『心理学研究』 第八一巻 第三号 pp.247-261
- 浅井智久・丹野義彦 2010 「統合失調症の認知神経心理学から見た自己意識―自己モニタリングのsense of self-agency―」 『Japanese Psychological Review』 vol.50, no.4, pp.371-383
- Bergson, Henri 1907. *L'Evolution Créatrice*, Quadrige/PUF
- Blakemore, S.-J., Wolpert, D., Frith, C., 2002, "Abnormalities in the awareness of action," *Trends in Cognitive Science*, 6, pp.237-242
- Blakemore, S.-J. & Frith, C., 2003, "Self-awareness and action," *Current Opinion in Neurobiology*, 13, pp.219-224
- Derrida, Jacques, 1967, *La Voix et le Phénomène*, Quadrige/PUF
- Christoff, K., Cosmelli, D., Legrand, D., Thompson, D., 2011, "Specifying the self for cognitive neuroscience," *Trends in Cognitive Science*, 15, pp.104-112
- Legrand, Dorothee, 2006, "The Bodily Self: sensori-motor roots of Pre-reflective self-consciousness," *Phenomenology and the Cognitive Science*, 5, pp.89-118
- Legrand, Dorothee, 2007, "Pre-reflective self-as-subject from experiential and empirical perspectives," *Consciousness and Cognition*, 16, pp.583-599
- Legrand, Dorothee & Ruby, Perrine, 2009, "What is Self-Specific? Theoretical Investigation and Critical Review of Neuroimaging Results," *Psychological Review*, 116, pp.252-282
- Sartre, Jean-Paul, 1936/1965. *La Transcendance de l'Ego*, VRIN
- Sartre, Jean-Paul, 1943, *L'Être et le Néant*, Tel/Gallimard
- Von Holst, Erich, 1954, "Relations Between the Central Nervous System and the Peripheral Organs," *The British Journal of Animal Behaviour*, 2, pp.89-94
- Wider, Kathleen, 1997, *The Bodily Nature of Consciousness*, Cornell University Press
- Zahavi, Dan, 1999, *Self-Awareness and Alterity*, Northwestern University Press
- Zahavi, Dan, 2006, "Thinking about (Self-) Consciousness: Phenomenological Perspectives," *Self-Representational Approaches to Consciousness*, MIT Press
- Zahavi, Dan & Parnas, Josef, 1998, "Phenomenal Consciousness and Self-Awareness: a phenomenological critique of representational theory," *Journal of Consciousness Studies*, 5, pp.687-705